
双月の照らす世界譚～漆黒の魔王～

月代 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双月の照らす世界譚〜漆黒の魔王〜

【Nコード】

N3340J

【作者名】

月代 唯

【あらすじ】

二人の神の化身である二つの月の光が、闇の夜を照らしてくれる世界。そこでは魔法が使える人間は魔族と呼ばれ、人間の住む領土から迫害されていた。

―彼らは望む。自らの居場所を指し示してくれる、魔王の再誕を。そしてそれと時を同じくして、生きる意味を見失った青年「蔵本透樹」が謎の声に導かれてこの世界へやって来ようとしていた。残酷描写、R15タグは要素を含む話が出た時につけます。

プロローグ

私達の世界の空には、いつも二つの月があった。

その月が二年に一度一つになると勇者が生まれ、百年に一度太陽を隠すと魔王が生まれるという。

これははるか昔から、この世界に伝わってきた予言だ。

百年前、この予言と同じように魔王が生まれ、勇者によって滅ぼされた。

そしてもうすぐ百年が経ち、きっとまた魔王が生まれるだろう。

だから、私はなんとしてでも魔王を見つけ出さなければならない。

きっとその魔王が、私達の希望になるから。

―東から昇る神と西から昇る女神

百年に一度、太陽を蝕むとき

世界から魔王が生まれるであろう

だが、二年に一度

二人の神が合わさる時に産まれた子ならば

魔王を滅ぼすことができるであろう

すべては夜を照らす、二人の神の思し召しなり―

一、暗黒の声

―もし、勇者が自分の為ではなく人の為に世界を救う存在ならば、俺は絶対に勇者にはなれないだろう。

RPGは、モンスターを倒して強くなったり、謎を解いて物語を進めていったりするから楽しい。だから、決してゲームの中の世界を救いたいという気持ちで戦っているわけではない。ゲームは所詮、ただの暇つぶしの遊びでしかない。

たった今、俺の目の前のテレビの画面の中で、魔王と勇者との闘いが繰り広げられていた。

魔王は、黒い鎧とマントを着て黒い剣を握っている。肌もどす黒いし、爪が凶器になりそうなほど鋭い。そしてその顔は・・・人のモノではなかった。見れば誰もが畏怖するような要素を存分に取り入れたその姿は、世界を悪に包み込む存在に相応しい。そして、これから勇者に倒される存在としても相応しかった。

対して俺の操作する勇者は、派手な赤いマントに黄金に輝く鎧に立派な剣を持っていた。勇者に憧れる子供から見ればその姿はとも格好良く映るかもしれないが、魔王に勇猛果敢に挑もうとしているこの勇者は、かつて弱いモンスターの中の代表であるスライムに勝つことさえやっとだったのだ。そこから世界を救うことが出来るほどの力を手に入れることなんて、常識から考えてまず在り得ない事だ。それこそ、死ぬほどの努力をしない限り。

確かに、勇者はゲームの中で何度か死んだ。―そして生き返った。徐々に強いモンスターを倒していった、魔王のもとまで辿りついたのだ。

魔王は、ラスボスなだけに今まで闘ってきた敵よりずっとデカイし強い。だが俺は、どのくらいまでレベルを上げれば楽にコイツに勝てるかを知っている。そして慣れた手つきでコントローラーを操作し、魔王に止めをさした。

「ふう・・・」

コントローラーを放り投げ、蔵本透樹^{くらもと とおき}は座っていたベッドにそのまま倒れこんだ。

ゲームをクリアしたという達成感を感じられなかった。実は、このゲームはもう8度も初めからやり直している。むしろ残ったのは大量の疲労感だ。良く考えてみると、夕食を食べ終えてから今の今までずっと休み無しでテレビゲームをやっていた気がする。

(・・・つまらないな)

最近、何をやっても面白く感じない。何をしようとしても、一向にやる気が出ない。

中学に居たときは、勉強がそれほどずば抜けている訳でもなく運動神経も平凡だった。だから高校も、レベルが低く落ちる心配が無い所を受験した。そんな時、ふと疑問に思ったのだ。何のためにこんなことをする必要があるのだろうか、と。

何のために生きる必要があるのか分からない。そう気づいてしまっ

たのだ。

―それから、何もかもが他人事のように思ってしまった、透樹は傍観者のように振舞うようになった。

何かを見ても感情を抱くことが少なくなり、傍からは冷徹な人間として見られていった。

時計はもうすでに1時をまわっている。明日は日曜だから遅く寝ても構わないのだが、透樹起きてても何もすることも無いのでそのまま寝ることにした。

だがその時、突然頭の中で誰かの声が鳴り響いた。

《ソノ前ニナニカ忘レテナイカ？》

「な・・・」

透樹は思わずベットから上半身を起こした。

周りには誰も居ない。聞こえた声は男のもののようにだったが、親父の声とは違っていた。

声の主が誰なのか。考えてもどうせ分からないだろうと思った透樹は、自分が一体何を忘れているのかの方を考えることにした。

学校からの課題は無かったはずだ。あっても多分、透樹はやらないだろうが。

風呂は夕食の前に入ったし、歯磨きは・・・してないけどそれを忘れるのは良くあることなんだが。

「・・・あ」

ー思い出した。

確かゲームをしている最中に、携帯にメールが来たことを知らせる着信音が鳴っていた。だがその時透樹は、ゲームを中断するのが面倒だったのでメールを確認するのを後回しにしていた。

たかがメール如きにわざわざ声が頭に鳴り響くかどうかは謎だが、メールが来ること自体滅多に無い透樹はすぐさま携帯を持ってくるとメールを確認した。

「愁から・・・か」

牧原愁^{まきはらしゅう}。透樹の数少ない友の一人。いや、今はもう友であるのかは分からない。

なぜならば、彼が3ヶ月ほど前から不登校になって以来、会っても話してもいないからだ。

愁と透樹は、中学が同じだったのでそのことがきっかけで高校から良く話すようになった仲だ。だが愁は、高校に入ってからしばらくして何度もガラの悪そうな先輩に呼び出されるようになった。

一体彼らは、何のために愁を呼び出していたのか。それは、聞かなくても愁の様子を見ただけで大まかな察しはついた。愁は一言で言うなら下級生イジメを受けている。本人は気づいていなかったが、首の後ろに痣が残っていることがたまにあった。

だが、その時の透樹は既に冷徹な人間になりきってしまった後であり、何をしようとも愁の受けている虐めを止める事が出来ないということを知っていたため、透樹は何もしなかった。

それでもただ一つだけ、あいつに「悪いけど、俺はお前を虐めから助けることも庇うことも出来ない」という内容のメールを送った事がある。その時は「大丈夫」という返事が返ってきたが、それから

一週間もしないうちに愁は学校に来なくなった。愁からのメールもそれっきりだった。

そして今日、3ヶ月ぶりに愁から来たメール。そこには、「小遣い叩いて明日、少し遠出したいんだけど、一緒に来てくれないか？」と書かれていた。

「遠出・・・って、ずいぶん突拍子もない内容だな・・・」

透樹の知る限り、愁はそんなことをいきなり言い出すような奴ではない。

だが、彼の心の傷が少しでも癒えるのならば、遠出に行かせてやるのも悪くないのかもしれない。

そう思いながら透樹が返信ボタンを押そうとすると、ついさっき聞こえた声がまた頭の中で鳴り響いた。

《誘イヲ受ケロ》

「あーはいはい」

どうやら、謎の声が言う”忘れていること”とはメールの確認で正解だったらしく、その謎の声は透樹を愁の言う遠出に連れていかせたいらしい。普段は、あまり他人からの指図を受けない透樹だったが、なぜかこの声の命令を聞くことに悪い気はしなかった。

返信するメールの内容に了承の言葉を入れ送信すると、透樹は眠るために目を閉じた。

一、暗黒の声（後書き）

謎の声の主が一体誰なのかは、後々発覚する予定です。
まあ、察しの良い方は既に予想出来るかと思いますが（笑）

二、友人

なんだか、とても嫌な夢を見た気がする。

目が覚めると外はだいぶ明るくなっていたが、時計は9時半を指していた。昨日はゲームで少々夜更かししていたため普段ならばもう少し長く寝ているはずだった。

目覚ましもかけていない。まだ眠いし、もう少し寝るか・・・と透樹は再び目を閉じた。

《・・・携帯》

透樹はがぼつと布団から飛び起きた。

そういえば昨日（時間的には今日だが）は、愁からの誘いのメールを承諾した後すぐに寝たんだった。

慌てて携帯を開くと、案の定愁からメールが来ていた。しかも、表示されている時間によると俺がメールを送ったすぐ後に来ている。ひょっとしたら愁は、俺のメールの返信が来るまでずっと寝ずに待っていたのだろうか。

・・・いや、さすがにそこまではないか。

ただ単に、愁は寝付けなかったのだろう。きっとそうだ。

メールには『11時に駅で待ってる』と書かれていた。

しかし、他に行き先とか持ち物とかお金についての必要な内容が一切入ってなかったから俺は困った。

「おいおい・・・一体俺は何を持っていけば良いんだよ・・・」

とりあえず適当に、財布に4万円ほど突っ込む。金さえあれば、と

りあえず大抵の問題はクリアできるだろう。

ついでに、最近肌寒くなってきたのでダンスからダウンジャケットを引っ張り出す。

・・・とりあえず、これならどこにでもいけそうな気がした。もちろん日本国内においてだが。

準備を終えてリビングに行くと、透樹の母親が透樹を見て目を丸くした。

「休日になのに早く起きるなんて珍しいわねえ」

「今日、愁と出かけてくる」

「愁君と？いつ帰ってくるの？」

「わかんねえけど、たぶん遅くなる」

愁が言うには遠出らしいので、ひょっとしたら今日中には帰ってこないかもしれない。

実際、愁の言う遠出とはどのくらいの遠出かは分からなかったのですが、その辺をぼかして答えた。

たぶん、母は遅くなるといっても今日中に帰ってくるだろうと思っているに違いない。

今日中に帰ってこなければ学校をサボることになるのだが、透樹はたまに親にばれない程度に2、3度学校をサボったことがあるので全く気にしなかった。

「ほんつとに悪いな。突然で」

駅に着くと、そこには既に愁が先に来ていた。

さすがに3ヶ月ぶりの愁は、記憶の中のいつも騒がしいほど元気な姿とは違っただいぶやつれて見えた。

「別に構わねえけど、目的地は？」

「此処」

そう言っただけで愁は2枚の新幹線の乗車券を出し、その1枚を透樹に渡した。

そこに書かれた駅名は透樹にとっては見覚えの無い名前だった。

「駅名じゃわかんねえよ・・・っていうか何でもう2枚も切符を買ってんの？」

「俺が誘っておいてお前にお金を払わせるのはなんか悪いだろう？」

既に愁は2枚の乗車券を買った後だったので、俺は黙ってそれを受け取った。

新幹線に乗るのは初めてだった。俺は家族旅行とは無縁で暮らしていたからだ。

しかしそれは愁も同じだったようで、新幹線に乗るとあの頃と同じようにはしゃぎ出した。

「俺さ、一度新幹線に乗って箱根とかそういうところに旅するのやってみたかったんだよねー！」

「へえ、そりゃ良かったな」

なんとなく久しぶりで、俺の口元も緩んだ。そしてこの一瞬、愁と

の過去のわだかまりを忘れられそうな気がした。もちろん、そんなことは出来ないし心の中では分かっていたけど。俺と愁は指定された席に向かい合わせに座った。

「・・・俺の居ない間にさ、学校で変わったこととかあった？」

愁が突然、ぎこちなく聞いてきた。顔は笑っていたが、無理して明るくしようとしているのが見え見えだ。

「いや、特になにもないな」

「え、ほんとに？透樹、彼女とか出来てたりとかしないの？」

「出来るわけねえだろ」

突然何を言い出すかと思えば、なぜか俺の彼女の有無についてだった。

愁はポリポリと頭を掻いた。

「あつれー、おっかしーなー。透樹なら出来てると思ったんだけどなー」

「その根拠は一体どこからだよ」

「前に加藤がさー、透樹のこと好きだって言ってたじゃん」

「いや、いつのことだよそれ。お前不登校だろ」

その加藤というヤツだって、俺は知らない。

「あれ、加藤じゃなくて佐藤だったかな？」

「それなら斉藤なんじゃないか？」

「あー！そうだよ、斉藤だよ！」

まあ、斉藤が俺にそういう素振りをした覚えは全くないけどな。

「でもさー。勿体無いよな。オレ達めっちゃめっちゃカッコイイのに彼女いないんだもんなー」

そういつて身を乗り出して俺の肩をポンポンと叩く愁。

そこに自分を入れるとはさすがだな。ついでに、男にカッコイイと言われても全く嬉しくない。

俺はため息を一つしてから、頬杖をついて窓の景色を眺めた。

いつのまにか町並みが少し変わっている。なんというか完全な田舎では無いけどコンビニが少し遠くて困りそうな感じだ。

「なんというかさ。透樹はこう・・・愛想笑いとかそういうの下手くそだよな」

横を向いて外を見ている俺の耳に愁の言葉が入ってくる。

「・・・お前も愛想笑いが下手になったな」

つい、さっきから思っていた本音を口にしてしまった。口に出してからしまった、と思った。

顔を正面に戻すと、口を半開きにして表情が固まってしまった愁がいた。

「・・・そうか・・・そうだよな・・・」

その後、新幹線の中で俺と愁は一言もしゃべらなかった。

二、友人（後書き）

遅くなってしまう、申し訳ありません。

キリをここまで！と決めたら、少し長くなってしまうました。
異世界へ行くまで、あと1話分の現実世界のお話があります。

三、湖

新幹線で約3時間（正確には2時間40分だけど）かかって、透樹たちは里のような場所にまで来てしまった。

「・・・で、どこだよここ」

「・・・田舎？」

愁が酷く曖昧な答えを返してくる。

あれか。目的地を良く分かって無いまま新幹線に俺を連れ込んでまで遠出したのかお前は。

「いや、田舎じゃねえだろ。どちらかと言えば観光地に近い雰囲気だろ」

「でもここ観光地じゃねえけど」

「・・・そこは知ってるのかよ。」

「でも田舎じゃなきゃどうやって表すんだよー」

「じゃあもう田舎でいいよ」

とりあえず、ここは田舎だということに決まった、らしい。

愁は自分の鞆から地図を取りだして、透樹について来いと言った。なんだ、地図を持っているということは既に下調べはしてたということか。

知らない振りをしやがって。くそう、騙された。

そんな風に透樹が悔しがっていると、愁は山道の方へ進んでいた。

遠出と言うより遠足のようになってきたみたいだ。ただし、透樹は遠足は嫌いだが。

それでも一応、ここまでついてきたついでなので透樹は少しだけ我慢することにした。

「透樹、ありがとな。何も聞かずにここまで付き添ってくれて」

足元に気を付けながら歩いていたら、愁が前方を向いたまま言った。それを見てやっと本音を出す気になったか、と透樹は溜め息をついた。

「で、そろそろ教えてくれるよな。何で遠出するなんて言い出したか」

「ああ・・・うん」

愁が気まずく頷いて、立ち止まった。辺りがしんと静かになる。ごくりと唾を飲み込んで、愁は少し震えた声で話し出した。

「透樹、オレさ・・・死のうと思う」

「・・・なんで？」

「分かってるよ。これは逃げなんだって。」

人生なんてさ、苦しいこと一杯あるよな。人はそれを乗り越えて成長するもんなんだから

でもさ・・・オレ、逃げたくなっちゃったんだよ透樹」

「・・・そうか」

最初から透樹はそんな予感がしていた。愁は死に場所を探していたんじゃないかと。

透樹は別に愁に死んでほしい訳ではなかったが、それでも愁を止めるための言葉は言わなかった。いや言うことが出来なかった。

それを愁がこの3ヶ月間考えて決断したことならば、透樹が今ここで何かを言っても無駄だからだ。

それに俺には愁を止める資格なんかないだろうし。

「でもさ、もし死ぬ直前になって、急に怖くなって死ねなかったらさ、かつこわりいじゃん。だから、ちゃんと見張ってほしいっていうか・・死ねなかった時に殺してほしいっていうか・・嫌だよな。そんなこと頼まれても」

そういうながら、愁は力なく笑った。

多分、無理な願いだと思っっているんだろう。

愁は透樹がそれを断ることを覚悟していた。

「いいよ」

「・・え？」

こんな返事が来るとは思っていなかったのだろう。愁は少し驚きを見せる。

透樹は真剣な目で愁をまっすぐ見た。

「お前が自分で死ねない時は、俺が殺してやる」

「ああ・・・ありがとう」

そして、二人はまた歩き出す・・・はずだった。

「・・・あれ？」

「どうした？」

愁は辺りを見渡して頭をぽりぽりとかいた。

「いや・・・なんか迷ったかも」

「はぁ!？」

「いやーごめんごめん」

愁はそう言って両手を合わせて詫びの仕草をする。

先ほどまでは小幅のある道を歩いていたはずだったがその道が今では後ろを向いても見当たらなかった。

「いいよ別に」

とりあえず、今は何とかして道を探さなければいけない。もう一度よく見渡して見ると、透樹はかろうじて獣道になっている場所を見つけた。

「愁、ここは通れそうだ」

「あ、うん」

今度は透樹が先頭に立って歩いた。持ってきた地図はすでに見ることを諦めて仕舞っていた。

しばらくの間、木々の枝を掻き分けながら進んだ。ある程度歩くと、かすかに水流が聞こえてきた。

「なあ透樹、何か聞こえないか？」

「水の音のことか？それなら俺もだ」

とりあえず、音源を目指して歩く。木がなくなって、ひらけた場所に大きな湖があった。

「おい愁。地図は？」

愁が地図を再び取り出す。透樹が覗き込むと、地図の中に湖を見つけた。

「ふえー、こんなところまで来てたのか」

愁が驚きの声をあげる。とりあえず、湖のお陰で帰り道はなんとかなりそうだが。

愁が屈伸をしながら、透樹に提案した。

「歩き疲れたし、ここで少し休もうぜ」

「・・・っ！」

「どうした？」

透樹が頭を押さえたのを見て、愁が尋ねた。

「・・・いや・・・何でもない」

透樹は必死で何でもないように取り繕った。

愁には言いたくはない。言っただとしても、頭がおかしくなっているとは思われないだろうから。

また”声”が聞こえたのだ。昨日から、聞こえている誰だか分からない男の声が。

透樹は、自分を落ち着かせるために息を吐いた。

「愁・・・お前って確か泳げなかったよな」

「え？ ああ・・・うん」

記憶の中にある、体育の授業のことを思い出して透樹は愁に尋ねた。ちなみに、透樹自身も泳ぎはあまり得意な方ではない。

「・・・湖に飛び込んでみるか」
「ええ!？」

愁が仰天して声を上げる。泳げないのだから、その反応は当たり前か。

「や、やめようぜー。オレ絶対溺れて死ぬから!」
「お前は自殺しに来たんじゃなかったのかよ」
「・・・あ」

そういえばそうだったーと愁が笑う。
おいおい、こんな感じでお前は本当に死ぬるのかよ・・・と透樹は少し気落ちする。

「まあ、とりあえずー」
「・・・え?」

愁が自分の背負っていたリュックを地面に下ろして透樹の腕を掴んだ。

その掴む力は外すのを絶対に許さないと言うかのように強く、透樹は思わず愁の顔を見る。

愁の顔は、彼のものだとは思えないほど無表情で冷たかった。
そして愁は湖に歩み寄り、透樹を掴んだまま思い切り飛び込んだ。

透樹は、その時”さあ、おいで”という言葉聞いた。

一、転生

湖の底は恐ろしく真っ暗だった。

沈んでいくにつれ、冷たい針のように水が全身に突き刺さって、重い鉛のように透樹を押し潰そうとする。

透樹はついに苦しさで肺の中の酸素を全て吐き出した。

意識を繋ぎ止めることが出来なくなり、この暗い闇に堕ちてしまおうと思った時、透樹は目の前に光を見た。

その光に手を伸ばす。

何かを掴んだと感じた瞬間、透樹は突然激しく巻き上がる水流に押し上げられた。

「ゴホッゲホッ」

飲んだ水の量と同じだけ胃の中のものが出て出される。

口の中の酸味が酷く気持ち悪く、さらに戻しそうになる衝動を透樹は必死に抑えた。

「大丈夫？」

かけられた声は愁のものではなく、凜とした女のものであった。

「・・・た、助ったよ。有難う」

そう言って透樹が見上げると、目の前には明らかに日本人ではない女がいた。

翡翠のような色の長い髪に人間のものではない長い耳が生えているのを見た時、透樹はぎょっとした。

向こうも訝しげにこちらを見ていた。その目もよく見れば黒ではな

く少し青緑が混じっていた。

次にかける言葉を見つけれないでいるうちに、女が向こうから問いかけてきた。

「あなた・・・その髪の色は一体どうしたの？」

透樹が訊きたいことを、何故か相手が聞き返してくる。

「・・・いや、産まれた時からこの色だけど」

「そう・・・」

透樹が答えると、女は何か考えこみ始めた。

「っっていうか、お前こそ――」

「立てる？」

「あ、ああ・・・」

透樹が今度は聞き返そうとしたが出来なかった。

女は透樹の腕を引いて立ち上がらせてくれた。

「名前は？」

「一蔵本透樹だ」
くろもことおき

「クラモトというの？おかしな名前ね」

「いや、透樹の方が名前だよ」

女が外国人のような返答をした。やはり日本人ではないのは確定だろう。

「どっちでもいいわ。トーキ、あなたに力を貸して貰いたい。私と一緒に来てちょうだい」

そういつて、女は透樹の腕を掴んで森の中へ入った。

「お、おい！待てよ！」

透樹は慌てて掴まれた腕を振り払おうとする。

一緒に湖に落ちた愁の安否をまだ確認していない。あいつはひよつとしたら溺れているかもしれない。愁が何故自分をも湖に引っ張り込んだのかも問い質さないといけない。

それに、透樹は自分のことを名乗ったが名前も知らない相手に力を貸すと言われても納得がいなかった。

しかし、女の力は思った以上に強く透樹は掴まれた腕を振り払うことが出来なかった。

「待てって！まだお前の名前を聞いてないだろっ！」

「・・・そういえばそうね」

「うわあっ!？」

ドサッと透樹が前のめりに倒れた。女が透樹の言葉で急停止したからだ。

「初めまして。私はリアグナ・シルフィード。エルフ族の末裔であり、元魔王直属の部下です」

「・・・はい？」

地べたに転がったまま啞然とした。

リアグナと名乗った女の自己紹介のうちほとんど半分が、透樹には理解できなかった。

「ええ・・・エルフ族？魔王？」

ファンタジーじみている。例えるなら昨日（正しくは今日の午前ま

で) やっていたゲームの世界のような設定の自己紹介だった。

俺はひよっとしたらとんでもない人に助けられたのではないだろうか。ゲーム依存症とか、そういう人に。

「・・・お前、頭大丈夫か」

「問題ないわよ？」

心配して訊いてみたら平然と返された。ひよっとしたら自覚がないのだろうか？

「ええと、リアー」

『コウオーーーーーーン』

「っ！」

目の前のリアグナにもう一度問い質そうとすると、まるで狼の遠吠えのような声に静止された。それは犬のようなおとなしそうなものの鳴き声ではない。犬よりもはるかに太く、低く、威圧感がありどこまでも遠くまで響き渡るような恐ろしい声だった。

「グリム・・・！」

リアグナが振り返って、声をひそめながらも酷く警戒した様子で目の前を睨みつけた。

そこには、透樹やリアグナよりもひと回りほど大きな真っ黒な狼がいた。大きな舌を涎を垂らしながら突き出し、目が血のように紅くこちらをじっと睨みつけていた。

「な、なんだあれ・・・」

狼が日本にいるはずがない。ましてやあんな化物じみた狼なんて透

樹の知っている世界には存在しない。

―まるで、ここが夢の中か。はたまた異世界へ来てしまったかのようだ。

『ヴァアウウウウ!』

黒い狼が一声吠ええると、こちらへ跳びかかった。リアグナと透樹は間一髪でそれをかわした。

しかし狼は身を翻し、さらにこちらへ跳びかかろうとした。

「トーキ!そこで動かないで!」

リアグナが叫んで、手を狼の方へ伸ばす。すると、彼女の手の中には黄緑色に光る弓矢が発現された。

狼に向かって光の矢を放つ。ヒュンと音がして狼の首元に矢が刺さり、矢は消滅した。

『グルルルルウ』

「くっ・・・」

黒い狼に効いた様子は無かった。狼は少しも怯まずにリアグナに跳びかかる。

リアグナはそれを人の動きとは思えない俊敏さで回避した。

さらに二本の矢を狼に向けて放つ。狼は、放たれた矢を顎で噛み砕いた。

「おい、リア!」

「分かってる!」

リアグナは弓を捨てて、手のひらの上に小さな風の渦を作った。

それを狼に向けて飛ばす。顔に当たると毛などが切れて、狼は少し怯んだ。

透樹は、その現象に覚えがあった。まるでかまいたちだ。

「逃げるわよ！」

そう言って、リアグナはもう一度透樹の腕を掴んで走り出す。今度はお互いが本気で走っていた。

リアの足が異常に速い。そして透樹もこれほど速く走ったことはなかった。

きっと危険な状況が力を引き出している所為もあるのだろうが、追い風が強く強く二人の背中を押すように吹いていたのである。

黒い狼の声は聞こえなかった。きっと追いついてはいない。

追いかけるようにも、追い風のおかげでずっと匂いは辿れない筈だ。

そして、透樹の体力が尽きて走れなくなるまでの数分は2人は逃げ続けた。

一、転生（後書き）

やっと異世界にやってきました。

ちなみに、暫らく投稿の時間が空いたため、何でタイトルを月夕の魔王にしたのかまったく覚えてません。

二、魔王城

「なんだこれ・・・」

透樹は、唾然として目の前に佇む建物を見上げた。

そこには透樹が知っている世界には有り得ないはずの巨大な城があった。それもただの城ではなくいかにも魔王が中にいそうな、そんな不気味な雰囲気を出している。

辺りが薄暗くなっているのによくは見えなかったが、城全体体が石造りになっていてどこか寂れた感じがあった。

透樹はここでやっと自覚した。この世界で間違っていたのはリアグナではなかった。自分だったのだ。

「さあ、入るわよ」

リアグナが城だということを気にせず正面の正門から入っていく。透樹は慌てリアグナを追いかけた。

「おい、リア・・・なんだっけ」

「リアグナ・シルフィードよ。覚えなさい」

「長いからリアでいいか？」

「いいわよ。不本意だけど」

城の中は真っ黒だった。リアは場所をよく知った様子で壁の蝋燭に火を付けていった。

「気味悪いなここ」

透樹は無言で作業をしているリアに同意を求める訳でもなく話しかけた。

「まるで魔王城だよな」

「魔王城だからね」

リアが何事もないような風に答えた。

そういえば、元魔王直属の臣下だとか言ってたか。

「他の人は？魔王様とか兵士とか・・・」

「いないわ」

「え、何で？」

「魔王陛下は死んでしまったわ。他の兵士たちもほとんどが死んだ残り残りは身を隠してる」

「つまり、魔王は勇者に負けたってことか」

透樹がああ時のゲームを思い出して口にする、リアは透樹をキッと睨み付けた。

「悪かったよ・・・お前一人なんだな」

「一人じゃないわよ。あなたがいるから」

「・・・それってどういう意味だ？」

気付けば、透樹達は魔王が座る台座のある場所まで辿り着いていた。

「トーキ。あなたには人間を滅ぼす2代目魔王になってもらおう」

「・・・は？」

透樹は聞き間違いか、はたまた見当違いじゃないかという線を疑った。

人間であるはずの透樹が、人間を滅ぼすための魔王になれるはずがない。

「いやいやいや、無理だって！だって俺は人間だぞ」

「先代魔王も実は人間よ。大丈夫、あなたには魔王になれる素質がある」

リアが真面目な顔で断言した。

「・・・どういう根拠で？」

「先代魔王陛下であるアイヴァン様が死ぬ直前に予言したの。黒髪と黒い瞳を持つ者が次期魔王になるだろうってね」

「いや、俺以外にもこんな色の人なんて沢山いるだろ」

「滅多にいないわ」

透樹にしてみたら、リアの髪の色の方が滅多にいないが。

「そしてもうひとつ、あなたが現れたあの湖は魔力の毒素がたくさん溶け込んでいる場所。あそこに潜って平気だったのは先代魔王様とあなただけよ。だから、あなたが魔王でないはずがない」

「もし、平気じゃなかったらどうなってたんだ？」

「魔力を持たない生物ならあの湖の水に触れただけで即死、魔力を持っている生物でも触れれば激痛が走って5分から10分で命に係わるわ」

「・・・マジかよ」

魔力の毒素が具体的にどういうものかは良く分からないが、とにかく自分がかなり危険なものに触れていたという事実を知り透樹は啞然とする。

そういえば、一緒に愁もあの湖に潜ったはずだ。透樹は、想像でき

る最悪の結果に至りつく前に思考を放棄した。

「あなたが何故あの湖に潜っていたかは知らないけれど、あなたは間違いなく魔王になるためにここにいる。だからもう一度繰り返し返すわ。

トーキ、あなたは人間を滅ぼす魔王になりなさい」

先ほどもリアの口調と眼差しは力強かった。透樹はその気迫に圧されて、きつと敵わないだろうと悟った。

「・・・拒否権はないんだな」

「もちろん」

透樹はついに観念した。

「わかったよ・・・」

でもその代わり、俺は戦いかたを知らないから戦えないし、どうやらこの世界についてもよくわからないから教えてほしい」

この世界にとって透樹の存在は産まれたばかりの赤子に等しい。しかし、透樹は今まで自分がいた世界で死んだように生きていくよりもこちらの世界で生きていくことの方が魅力があるように見えた。

―それに、少なくともこの世界は俺を必要としている。
必要とされること自体は、透樹にとっては悪くない気分だった。

「はぁ・・・」

透樹はリアに案内された客間のベッドに倒れ込んだ。さすが魔王城の客間、ベッドの質が庶民のものとは段違いだった。部屋は微妙に薄暗い。まあ、この部屋の灯りがテーブルの上にある蝋燭1本と窓から差し込む月明かりだけだから仕様がなない。

―今日は何だかいろいろあった。

謎の声が聞こえるし、愁が遠出に誘うし、新幹線で本当に遠いところに行ってしまった。そして湖で溺れかけて、いつの間にか見知らぬ世界に来てしまい、黒い狼にも襲われ、魔王城に辿り着いて最終的に魔王になってほしいと頼まれた。

「俺が魔王か・・・」

確かに透樹は自分は勇者にはなれないだろうとは思った。しかし、だからといって魔王になれるというワケではない。・・・恐らく、どちらかと言えば魔王なんだろうけど。

魔王は人間を滅ぼさなければならぬ。リアは俺にこの世界の諸事情を丁寧に教えてくれた。

この世界には魔法というものが存在する。そして、魔法を使える才能を持つ種族は人から恐怖の念を込めて魔族と呼ばれる。

・・・これだけを聞けば、魔族は魔力を持たない人間よりも優位に立っているはずと思える。

しかし現実はそうではなかった。

実際、魔族といっても人間にとって脅威になるほどの魔法の才能を持った者は魔族の中でも一握りほどしかない。魔族のほとんどは人間に友好的で不戦の一手を辿ろうとしていた。

それに比べ人間は、魔族の謎に包まれた力への恐怖から魔王を封じる力をてに入れた。その力を与えられ、魔族を隅から隅までほとんど倒し尽くして先代魔王を滅ぼしたのが勇者である。

そしてこの状態の中で最も不運なのは、人として生まれ魔法の才を持ってしまった人間だ。

原因は分らないが、魔族と全く関係のない魔法を使えない人間の間に稀に魔法を使える人間が生まれてきてしまうらしい。

その子供は、魔法が使えることによって親に捨てられるか迫害をされるか、いずれにしろ良い境遇には立たされない。

そして、先代魔王もそのような境遇に生まれた人間だった。

先代魔王は人間への復讐と魔族が幸せに生きていけるための世界にするために、魔王の座に立ち人間と争った。しかし、勇者によってその宿望は実現することはなかった。

そして、リアは探していた。自分達魔族を導いてくれる新たな魔王の存在を。

それは自分達魔族を迫害した人間たちへの復讐のためでもあり、自分達の住む世界を得るため。

ひょっとしたら、リアは自分の都合の言い様に美化して透樹に語っている可能性も無くもない。だが、もしもこの世界の人間がリアの言ったとおりのような人間だったなら――

「全く、くだらねえ・・・」

―とても嫌いな人種だ。

透樹はベッドから起き上がると、ベランダに向かった。

外はひんやりしていたが、それほど肌寒くはなかった。

目の前には森が続いていて、やはり電気のような明かりはない。

透樹はため息をついた。一体、いまさら何を期待しているのだろう。ここは完全に異世界である。

それを証拠付けるように、透樹が見上げた夜空には見慣れたはずのあの世界と同じような月が2つあった―

三、特訓

なにやら、夢を見た気がした。

魔王城の客間のベットは快適だった。いや、寧ろ快適すぎるぐらいに快適だった。

ひよっとしたら、快適すぎて逆に眠りが浅かったのかもしれないが。

そことても暗くとても静かで、背筋が凍るほど冷たかった。

目の前には黒い人影がある。それが誰なのかは分からない、透樹の知り合いでもない。

”それ”が透樹に何か語りかけてくるのだ。低く、恐ろしく冷たい声で――

「起きなさい、トーキ！」

「・・・起きてるよ」

厳しげな目付きでリアがこちらを睨んでくる。考え事をしてボーとしていたら居眠りしていたのだと勘違いされたらしい。

透樹とリアは今、魔王城の食堂にいる。これがまた広い。無駄に広い。どこかのマンガで見たようなあの無駄にながーいテーブルが今、目の前にある。

その端っこにリアと透樹がぼつんと座っているのだから、この寂しさは言葉にならない。

ただ唯一の救いは、明らかに魔王が座るべき長方形のテーブルの辺の短い方の席に座らせられなかったことだった。

あそこに一人座ると多分、いや、きっと凄く虚しくなるだろう。それに、まだ自分が魔王だと自覚出来ていない透樹にとってあそこに

座るのはとても躊躇した。

リアもそれを分かってくれているのか、それともやはり透樹が魔王であることを認めきれていないのか、今日の朝食はこの長いテーブルの中ほどに用意されていた。

透樹とリアは向かい合わせに座っている。目の前にある食べ物は王様や貴族が食べるような豪華な食事・・・ではなく、干し肉や焼きキノコ、そして木の実だった。

キノコや木の実が城の周りの森で採った者だろう。干し肉は恐らくこの城の食料庫に残っていたものに違いない。

これだけをみれば、リアが今までどれだけ苦労してきたか、そして自分がこれからどれだけ苦労するのかが簡単に想像できる。

「・・・大変だな」

「黙ってしっかり全部食べなさい」

「はいはい」

魔王候補と言えど、見ず知らずの俺にご飯を用意してくれているのだから文句は言えない。

透樹は出された食べ物全てを残さず腹に詰めた。しかし、リアのこの言葉には彼女の思惑のヒントがあったことには透樹は気づかなかった。

朝食が終わった後、リアは透樹を広間に連れて行った。

そこでリアは別の場所から2本の剣を持ってきて、その1本を透樹

に渡した。

刀身が細めの剣でリアが持つとても様になっている。それに比べて透樹が持つとかなり不釣り合いに見えるだろう。

「なあ・・・オレが昨日言ったこと覚えてるか？」

「ええ、魔王になることを了承してくれたわ」

透樹が問いかけると、リアが少しだけ威張ったように答える。

確かにそれとも言った覚えはあるが、リアの的外れな返答に透樹は消沈した。

「そうじゃなくて・・・俺は戦えないって言った筈だけど？」

「だから、こうして私が鍛えるのよ」

「マジかよ・・・」

やっぱり、魔王は戦わなければいけないらしい。ゲームの中じゃ、家来に命令して自分はグータラ。そして、勇者が最後にやって来て魔王はやられて世界は平和というイメージがあっただが。

「まあ、そういうわけにもいかないよな。リアにとっては魔王が正義なのだから、魔王が勇者にやられて終わると言う訳にはいかない。どーりで、朝食をしっかりと食べろと言われたわけだ。」

「魔王になってもらうからには、それ相応の力をつけてもらわないと・・・さあ、いくわよ！」

「え！？ちよっ・・・！」

リアが剣を構えて襲って来たので透樹は咄嗟に受け流した。だが、リアは容赦なく追撃した。

「何をやってるの！避けるだけじゃなく、剣を使いなさい！」

「いや、んなこと言われても！」

先ほどからリアが軽々と振り回している剣は結構重い。恐らく片手剣なのだろうが、透樹はそれを両手で持って逃げるのが精一杯だった。

だが、このままこうしていても確実にリアにやられる。というか殺やれる。リアの気迫が物凄く怖い。

透樹は冷や汗を出しながら懸命に逃げていたが、背中が壁にぶつかりついに追い込まれてしまった。

「リア、やめろっ！」

リアが剣を大きく振りかぶって最大の一撃を透樹に当てようとする。透樹はこの時、絶体絶命の死を覚悟した。思えば、この世界に来てからまだ24時間も経っていない。愁がどうなったかも確認出来ないし、なんだかやり残したことがたくさんある気がする。

命っていうのは失くす直前になってやっと惜しくなるもんなんだなと、透樹は痛みが来る前に瞼を閉じようとした。

一瞬、透樹は黒い影を見た。それが何かを導くように動くのを確認すると、透樹は迷わずそれに従って剣を構えた。

剣と剣のぶつかり合う大きな音が広間全体に響く。透樹の構えた剣がリアの剣を受け止めると、リアは暫らく動かなかった。

剣を今まで握ったことの無いハズの透樹がリアの剣を完璧に受け止めたことや、剣を構えず逃げ腰だった透樹が突然剣を使ったことなど、理由はたくさんあるがどれも大きな理由ではなかった。

「・・・アイヴァン・・・さま・・・？」

「リア？・・・おい、大丈夫か」

リアが戦意を失くし腕を静かに下ろすのを見て、透樹は困惑した様子で問いかけた。

リアは衝撃を受けていた。剣を振り下ろした時に、先代魔王の影が透樹と重なったからだ。

先代魔王の直属の臣下であつたリアが、先代魔王と他の人間を見間違えるはずがない。一瞬でも魔王陛下だと思つてしまったのは、この人間の髪と目の色が魔王陛下と同じ色だったから、そしてこの人間の剣の受け止める構えが”偶然にも”魔王陛下と全く同じだったからだ。

そうに違いない、とリアは自分に言い聞かせた。

リアは、まだ透樹という人間を完全に魔王候補だと認めてはいない。確かにリアにとって魔王の存在が必要不可欠であるが、自分より弱くて一度も剣を握ったことの無いこんな子供のような人間に、アイヴァン様の代わりになどなれるはずがない。今もアイヴァン様が生きておられさえしていれば――

リアは剣の柄をぎゅっと握り締めた。

「・・・リア？」

暫らく応答の無かつたリアが、今にも泣き出しそうな表情になっているのを見て透樹はおそろおそろ名前を呼んだ。

「・・・なんでもない。続けるわよ」

「あ、ああ・・・」

リアが再び剣を構えたのを見て、透樹もたどたどしく剣を構えた。

女心は分からないが、本気で泣き出されると困るので、透樹はとりあえずもう少し努力してみることにした。

結局数十分後には透樹は体力の限界でダウンすることになるのだが、リアの特訓は実質午前の間続いた。

しかしその特訓では、リアが透樹に先代魔王の影を見ることはもう無かった。

三、特訓（後書き）

なんだか、まとまりきらない状態になった気がします。

四、魔法

「ああ、もうダメだ。動けねえ・・・」

リアの約3時間にもおけるスパルタ特訓を乗り切った(?)透樹は、体力の限界で広間の床に倒れこんでいた。

結局あれからも透樹はリアに防戦一方だった。威張ることではないが、普段はゲームばかりで時たま勉強するぐらいの高校生に体力を求めちゃいけない。本当は体育は苦手な方ではないつもりだったのだが。

「全くこれぐらいで・・・だらしない」

リアがなにやら水筒のようなものを持って広間に戻ってきた。透樹と全く同じ(もしくはそれ以上の)運動量のはずなのに、まったく疲れた様子を見せないところがさすがだ。

リアは屈んで、持っていた水筒を透樹に差し出した。

「ほら、これを飲みなさい。きっと楽になるわよ」

水筒の中身は、城の外の森から採ってきた薬草を集めて作った回復薬らしい。いわゆるゲームの中でのポーションとかエリクサーとかそういう類だろう。

「ああ、さんきゅ・・・んぶほっ!？」

なんとなく自然に受け取って一口飲もうとしたら、透樹は思い切り噴き出してしまった。

慌てて水筒の中身を覗き見ると、中には濃い深緑のなんとも飲み

くそんな液体が入っていた。まるで罰ゲームなどで飲まされる青汁だ。

「お婆ちゃんに教わらなかったの？」 葉は苦いほど良く効く” って言うでしょ？」

リアがいたって真面目な顔で言う。それはたぶん” 良薬口に苦し” のこの世界のことわざのようなものだろうけど。

しかしこれだけ苦いとさすがに飲みづらい。だって今、舌があまりの苦さに麻痺してるんだから。

それでも透樹はリアに青汁を無理やり飲まされた。おかげで口は酷いダメージを受けたが、身体はある程度動けるくらいには楽になった。

昼食も朝食と同じ場所であった。今度はメニューが干し肉と山菜炒めになっていて、山菜炒めに砕いた木の実がトッピングされていたりするひと工夫があったりすると少々豪華に思えた・・・たとえば、口が麻痺していても。

午後は、剣の特訓ではなく魔法の特訓だった。

午前の間ずっと剣の特訓をさせられたので、ひよっとしたら午後もこの地獄が続くのではないかと考えていた透樹はそれを知って少し安堵した。

だが、本当に安心はしてられない。魔法の特訓が一体どういうものなのか、魔法の知識が皆無な透樹には全く検討がつかなかった。

「まずは魔法について詳しく説明するわ。

私達魔族は生まれた時から既にそれぞれの魔法の性質や強さが決め

られているの」

リアの話を聞くと、この世界の魔法は透樹の考えていた魔法と比べてかなり特殊かつ単純だった。

世界の諸事情について説明する時から、魔法を使える者を”魔法の才能を持つ者”とわざわざややこしく言っていたのはおそらくこういう魔法のシステムだからだろう。

生まれた時から性質が決められている。つまり、生まれた時から火属性だとか水属性だとかそういう属性は決められていて、別の属性は一生使うことは出来ないということだ。

また強さも決められているのだから、成長しても魔法の威力が大きくなることはない。つまり、ゲームのようにレベルアップすれば魔力が強くなる、なんてことにはならないのだ。

逆に言えば、たまたま強い魔法の才能を持つ者は生まれた時から強い魔法を使えることが出来るという意味である。これは、かなり危険である。

―ちなみに、リアの魔法の性質は”風”であった。

「ただし、似たような性質を持つ人はいても、完全に同じ魔法の性質を持つ人はこの世にはいないの。これは外見とか精神とかと同じね。

・・・だから、自分の魔法の使い方は自分で研究しなければいけないの。もし特訓するのなら、魔法の使い方の研究が”特訓”と言えるわ」

リアは自分の掌の中で小さな風の渦を作って見せた。

「例えば私の”風”という性質の魔法は、普通にそよ風を作ったり追い風を作ったり、ある程度は竜巻だって作ろうと思えば作れる。でも私は、この”風”を物に纏わせて動かせたり、自分の身体に纏

わせて身体の動きを手助けすることで俊敏さを上げたりすることも出来る。

・・・これが扱えるようになるまでにはちょっとかかったわ。やりすぎて骨が折れたこともあったし」

「・・・自分の身体を大切にしてください」

骨が折れたことを涼しい顔で語るリアに、透樹は少し寒気を感じた。

「まあ、それはともかく。今日はトーキ、あなたの魔法の性質がどういうものか・・・というかそもそも、魔法の才能があるかどうかを調べるから」

リアが要らない言葉を付け足した。そもそも魔法の才能が無ければ魔族側の味方なんてする必要がないのだから。

しかし、透樹は今まで魔法を使ったことが無いのだから、実は魔法の才能はありませんでした―は、ありえないことでもない。

リアは今度は丸いボールのようなものを用意して、テーブルの上に置いた。

見た目は赤いゴムボールだ。ただし、リアが触らせてくれなかったので本当にゴム製かどうかは分からなかった。

「これを手を使わずに動かすか燃やすか好きにやってみて」

「好きになって・・・」

「とりあえず何か念じてみなさい。正しい魔法の性質で反応するはずだから」

なんとなく釈然としない説明だなど思いつつも、透樹はとりあえず言われたとおりに念じてみることにした。ただ無難に、リアが言っていた通りに。

(動け)

赤いボールは静かに転がりだしてテーブルの端へ向かったかと思うと床に落ちた。一ミリたりとも弾まなかった。どうやらこれはゴム製ではなかったらしい。

「・・・地味だな」

自分の魔法の才能に、透樹は感想を述べた。

四、魔法（後書き）

敢えて言います。魔王はチート予定です。
自分は大したことないんだぞーと見せかけて最終的にチート予定です。安心してください。魔王ですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340j/>

双月の照らす世界譚～漆黒の魔王～

2011年12月28日01時45分発行